

「私の『窓辺』に春が来た」

2020年3月30日

私の「悪性リンパ腫」の抗がん剤の治療は、昨年1月に終わり、3月ごとの定期検診になり、5月に「治癒した」とのお墨付きをいただいた。1年経ったことになる。退院した時は、体重が13キロほど減っていたが、現在は元の体重に戻っている。日常生活に不便はないが、歩くことが難儀である。毎日、3千歩から5千歩を歩こうと努めている。車と行き交うことを避けるために、団地の中を通り抜け、公園の木々や草花を楽しみながら、歩いている。完全快癒とはいかないが、気長に養生しようと思っている。病気の時、本当に多くの方々から祈っていると見舞いをいただき、どれほど励まされたか分からない。ただ、感謝である。



私の窓辺の春はボケの花から始まる。ところが、ボケが赤い蕾をつけると、ヒヨドリがきてついばむ。公園のボケは花びらを満開にして咲いているが、私の窓辺のボケは開くことなく、蕾のまま、食べられている。クリスマスの頃、クリスマスホーリーに赤い実がつくと、ヒヨドリが毎日来て、ついばみ、1週間くらいで食べ尽くす。ボケの蕾をヒイラギの実と間違えているのではないだろうか。団地では鳥に餌を与えない決まりになっている。クリスマスホーリーやボケを餌として与えている訳ではないが、鳥が来てついばむのを楽しんでいる。

窓辺から見る春の証しは、カラスの夫婦がケヤキの木の間には小枝を運び、懸命に巣作りをすることである。昨年も巣ができた頃、人間が取り除いていた。今年も、取り除かれた。カラスの繁殖は抑えねばならないので、カラス夫婦の苦労は徒労に終わり、気の毒だが仕方あるまい。



ボタンが今年は5つ花が咲いた。子供の頃、庭にあったのを持って来たもので、もう70年以上、経っているのではない。苦境に耐えて生き延び、見事に花を咲かせている。「あっぱれ」と言ってやりたい。クンシランの花も綺麗に咲いた。鉢植えのバラをいただいた時、小さく紛れ込んでいたのを、妻が植え替えて育てたら、逞しく成長した。草木は、条件さえ整えば、自らを輝かせるものである。



私の窓辺の春は、何と言ってもサクラである。窓いっぱい咲き誇るサクラは圧巻である。太宰治は、「富士には月見草がよく似合う」と言ったが、サクラの向こうに見える富士山もなかなかのものである。自然は総出で、春を喜び、生命を躍動させている。世界中に蔓延した新型コロナウイルスが収束し、安心した生活ができ、また、私の

体調も回復し、元気に活動できる「爛漫の春」の到来を望んでいる。